

Public Commitments に基づく 2 種のコトダ構文の分析

田村 早苗 santamura@gmail.com

北星学園大学

1. はじめに

本発表では、現代日本語の「コトダ (およびその丁寧体コトデス)」を用いた構文 (以下、コトダ構文と呼ぶ) の意味論について、談話情報の更新と談話参与者間の shared commitments の調整という観点から分析をおこなう。

■ 対象とするコトダ構文：以下の 2 種類

▶ A) 「感心・あきれ」の用法

- (1) a. よく間に合ったことだ。 (益岡・田窪 1992 : p.176 (8))
 b. 10 歳にして大人顔負けの強さですから、将来が楽しみなことですね。

▶ B) 当為的用法

- (2) a. 暗くならないうちに帰ることだ。
 b. 家族が大切ならば今すぐやめることですね。 (現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ)

■ 先行研究：

▶ A) 「感心・あきれ」の用法 (記述研 2013)

- ✓ 機能：「感心」「あきれ」
- ✓ 句タイプ：感嘆文に近い分類も「驚嘆系の感嘆型」(益岡 1991)、「感動文」(益岡・田窪 1992)
- ✓ 研究があまり多くない

▶ B) 当為的用法 (益岡・田窪 1992, 野田 1995, 高梨 2010, 記述研 2013 ほか)

- ✓ 機能：「助言・忠告」「勧告」「脅し」
- ✓ 当為・義務モダリティに分類すべきか否かの議論 (益岡 1991, 2000, 森山 1997)

■ 問い：

- ① 2 種類のコトダ構文に共通性があるのか。
- ② (あるとすれば) 共通性をどのように分析できるか。

■ 主張：

- ① 2 種類のコトダ構文について、コト (ダ) には共通の意味論的分析を適用できる。
- ② コトダ構文は、主観的命題に関して他者との shared commitment を調整する際に、話し手の Public Comitment の表明に用いられる。(→分析はエラー! 参照元が見つかりません。))

■ 動的意味論に基づく分析 (C は文脈、PB_A は主体 A の Public Commitments、spkr は話し手)

- (3) コトダ構文について： $[[p\text{-コト}]] = \lambda p. \lambda C. (PC_{spkr}(C) + p)$
 ただし、 $\neg p$ が直ちに mutual assumption から取り除かれることはない

■ 議論の流れ

- 2 節：理論的枠組みと分析
 - 3 節：「感心・あきれ」用法の特徴
 - 4 節：当為的用法の特徴
 - 5 節：まとめと関連事項
- } 共通性の洗い出しと説明

2. 理論的枠組みと分析案

2.1. 枠組み：Public Commitments と Common Ground

本発表では、談話情報の更新の観点から、2 種類のコトダ構文に共通する意味論的分析を提案する。

一般的に談話情報更新の分析で用いられる Common Ground (= 談話参加者が共通して会話の前提としている情報：Stalnaker 1978 に加えて、Public Commitments (= 談話参加者が個々に commit を表明している情報：Davis 2008, Gunlogson 2001: Guerts 2019) という概念を用いる。

この枠組みでは、談話参加者それぞれの Public Commitments の共通部分を取ることによって Common Ground が形成される。たとえば事実に関する認識的な内容については、個々の public beliefs (public epistemic commitments) の共通部分を取り、義務や願望については public preference commitments (Davis 2009, Condoravdi & Lauer 2017) の共通部分を計算することになる。

ただし、Common Ground を形成する過程は「自動的」なものではない。この点が本発表の分析にとって重要になる。ある談話参加者が何らかの情報 p を自らの Public Commitments に含まれるものとして提示したとしても、その情報 p が Common Ground に組み込まれるまでには談話参加者間での調整が必要となる。例えば、他の談話参加者が $\neg p$ を信念に持っていたり、あるいは $\neg p$ を排除するには至らないことを裏付ける情報を持っていたりする場合には、 p が Common Ground に組み込まれないように、何らかの応答を返すことが考えられる。このような Common Ground への情報の組み込みを調整する過程を、shared commitments = mutual assumption の調整過程と本発表では呼ぶことにする。

いっぽうで、ある情報がほぼ自動的に Common Ground に組み込まれると通常想定される場合もある。代表的なものとしては、談話参加者が同時に直接体験するような発話現場の情報が挙げられる。この点は、3 節以降のコトダ構文の特徴を論じる際に再度触れる。

2.2. コトダ構文の分析

■ 動的意味論に基づく分析 (再掲) (C は文脈、 PC_A は主体 A の Public Commitments、 $spkr$ は話し手)

(3) コトダ構文について： $[[p\text{-コト}]] = \lambda p. \lambda C. (PC_{spkr}(C) + p)$

ただし、 $\neg p$ が直ちに mutual assumption から取り除かれることはない

この分析によれば、コトダ構文の特徴は、下線を引いた但し書き部分にある。話し手は p を自分の Public Commitments として表しつつ (すなわち、 $\neg p$ を自らの PC からは除きつつ)、mutual assumption (談話参加者の Public Commitments の共通部分) から $\neg p$ の可能性を直ちに排除はしない。これは奇妙な状況に思えるかもしれないが、判断主体ごとに真偽の付値が異なるような p であれば、話し手がこのような態度を示すことも充分ありうる。以下、3 節と 4 節でこの分析を支持するデータを示す。

3. 「感心・あきれ」用法

3.1. scaler な要素の要求

(4) 「感心・あきれ」のコトダは、scaler な要素が含まれない述語部と共起しにくい。

■ 副詞や形容詞など scaler な要素がないと容認不可

- (5) a. ?? 雨が降ることだ。
 b. 雨がよく降ることだ。
 c. 連日ひどい雨が降ることだ。

この点は、scaler 述語と主観性・相対性とのかかわりを考えれば**エラー! 参照元が見つかりません。**)の分析で説明できる。scaler 述語は一般に文脈依存的であるとされ、比較対象となる集団や、どのような境界線を設けるかの情報を文脈から与えられたうえで真偽が決定される。さらに、文脈から与えられる基準が人ごとに異なる主観的なものである場合もある (Kennedy 2013, Lasersohn 2017)。(5b)や(5c)のような scaler 述語が含まれる例では、判断主体ごとの基準で言明の真偽が変わりうる際には、コトダ構文の意味論**エラー! 参照元が見つかりません。**)と矛盾しない。いっぽう、「雨が降る」のような主観的判断の違いが生じない述語はコトダの意味論に適合しない。

3.2. 事態に対する発話時の判断

(6) 「感心・あきれ」のコトダは、特定の事態に対する、発話時の話し手の判断を表す。

■ 特定の事態に対する判断を表す

- ▶ 個体レベル (individual-level) の述語と共起しにくい : (7a), (8a)
- ▶ 特定の事態に基づいて述べられる場合 (stage-level) は容認可能 : (7b), (8b)

- (7) a. ?? 娘はかわいいことだ。
 b. (自分の姿を見つけたとたん娘が駆け寄ってくるのを見て)
 いつもながら、娘はかわいいことだ。
- (8) a. (世界の各地方の雨量グラフを比べて)
 ?? この地方は雨がよく降ることだ。
 b. (1週間の滞在中 5日目までずっと雨が降っていた。6日目も雨が降っているのを見て)
 この地方は雨がよく降ることだ。

■ 発話時の話し手の判断を表す

- ▶ タを後接させると容認度が下がる
- ▶ 長期記憶に入っている知識を伝達する際には使えない

- (9) ?? 連日よく降ることだった。
 (10) ?? 10年前この大会に参加したチームは少なかつたことだ。

3.3. 眼前事態・情意表出の制限

- (11) 以下の場合、コトダ構文は不自然になる
 a. 眼前事態を単に描写する場合

b. 話し手の感情・感覚を単に表出する場合

■ 単に眼前事態描写をしている例では、「感心」を表しているとしてもコトダ構文は不自然

- (12) a. (東京スカイツリーが視界に入ってきて)うわあ, {高いね! / ??高いことだね!}
- b. (パンダの子どもが走ってくるのを見て)うわあ, {かわいい! / ??かわいいことだ!}
- c. (パンダの子どもが運動場を端から端まで走るのを見て)よく {走るね。 / #走ることだね。}

■ 話し手の感覚・感情を単純に表出する場合もコトダ構文は不自然

- (13) (テニスの練習をしていて)
 どんどんサーブが上手になってきた! {楽しい! / ??楽しいことだ!}

このような発話場面では、感情や性質帰属の表明という事態を聞き手に提示し、「現場情報として直接体験させる」ことが話し手の意図と考えられる。つまり「話し手が(スカイツリーを見て)高いと評価した」という情報が Common Ground に即座に加えられる。このような場面では、Common Ground への直接的な働きかけがなされているため、コトダ構文は不適切になると考えられる。

4. 当為的用法の特徴

4.1. 発話時の話し手の判断

- (14) 当為的用法のコトダは、発話時の話し手の判断を表す。

■ 発話時の判断を表す (Cf. ベキダ、ナケレバナラナイ)

▶ タを後接させると容認不可能: (15b)

- (15) a. 合格したければ、勉強することだ。 (野田 1995: 255, (8))
- b. *合格したければ、勉強することだった。 (野田 1995: 256, (12))
- Cf. もっと勉強するべきだった。

■ 話し手の判断を表す

▶ 「一般的な通念」に従わなくても、話し手が必要だと判断していれば使用可能 (Cf. モノダ)

- (16) 敵の士気を挙げないためには、次のリターンでストレートを狙う {*ものだ / ことだ / んだ}。
 (野田 1995: 259, (36))

■ 現実で遂行されない / 遂行できない内容を述べるができない (Cf. ベキダ)

- (17) (*本来なら) 社長のあなたが直接説明することだ。
 Cf. (*本来なら) 社長のあなたが直接説明するべきだ。

4.2. 聞き手の利益

- (18) a. (対話文の場合) 動作主体は典型的には聞き手 (野田 1995, 森山 1997, Cf. 益岡 2000, 記述研 2003, 高梨 2010)
- b. コトダ構文で表される内容は基本的に行為者にとって利益になる、目的達成のために最重

要な行為を述べている (野田 1995, 記述研 2003, 高梨 2010)

この点についても、「p-コトダ」の p が判断主によって真偽が変わりうる、主観的述語であることを求めるという本発表の特徴から説明可能である。すなわち、p-コトダが当為的に解釈される場合、p の部分の解釈に用いられる会話の背景情報には、主観的な内容 (判断主の目的や願望) に左右される部分が含まれている (personal Conversational Background である: M. Kaufmann 2011)、というのが意味論から規定される。聞き手は、p-コトダ構文によって p の真偽について自らを判断主体として決定することを求められており、結果として聞き手にとって利益になる行為として p が解釈されるのである。

4.3. 即時実行要求の不在

(19) 当為的用法のコトダは、その場で聞き手の実行を促す場面で使いにくい (Cf. 命令文) (高梨 2010)

■ すぐに実行されることを期待している場合にはコトダ構文は不自然になる

(20) (食事が進まない子供に対して)

a. 早くごはん食べなさい。

(高梨 2010, p.124 (55))

b. ?早くご飯を食べることだ。

(高梨 2010, p.124 (55'), 容認度原文)

(21) a. まあ、少し話そう。そこに座れよ。

b. ?? まあ、少し話そう。そこに座ることだ。

この特徴については、3.3 節で論じた「感心・あきれ」のコトダ構文の場合と同様に分析できる。本発表の分析によれば、コトダ構文は直接 Common Ground の情報を変更することがない。よって、即座に (聞き手などの主体が異論をはさむ余地なく) 遂行されることを話し手が予期している場面では使用が不適切になる。

5. まとめ

本発表では、2 種類のコトダ構文 (「感心・あきれ」の用法および当為的用法) について、それらの共通性を指摘して統一的な意味論分析を試みた。コトダ構文は話し手の Public Commitments に含まれる情報を提示するが、その情報が Common Ground に直接影響を与えるのではなく shared commitment の調整を聞き手に求めるという主張である。

5.1. 関連する現象

■ コトダロウ構文への拡張の可能性 (田村 2019)

▶ 推量用法ではコトのつかない「ダロウ」とかなり近い用法・機能を持つ

▶ 確認要求用法はダロウのみに存在、コトダロウには不在

←コトの補部が Common Ground や聞き手側の commitment/belief についての情報を操作しないという意味的特徴を持つとすれば説明可能

- ダを伴わない「～コト。」構文との違い
 - ▶ 高梨 (2010) が論じるように、コトダ構文とは別に分析する必要があるだろう
 - ▶ コトダ構文との違い
 - ✓ 単純な感情表出に使用可能:「美しいこと！」
 - ✓ 当為的用法の「～コト。」構文:「コトダと違って、聞き手が悪い状況に留まらないため、陥らないために必要、重要なことを示すという用法はない」(野田 1995)
 - ▶ 「ダ」があることで、談話参与者間の shared commitment の調整が必要になる？

参照文献

- Condoravdi, C. & Lauer, S. (2017) Conditional imperatives and endorsement, draft, To appear in Proceedings of NELS 47.
- Geurts, B. (2019) Communication as commitment sharing: speech acts, implicatures, common ground, *Theoretical Linguistics*, 45(1-2): 1-30.
- Gunlogson, C. (2001) True to Form: Rising and Falling Declaratives as Questions in English, PhD thesis, UCSC.
- Davis, C. (2009) Decisions, Dynamics and the Japanese Particle *yo*. *Journal of Semantics*, 26: 329-366.
- Kaufmann, M. (2011) *Interpreting Imperatives*, Springer.
- Kennedy, C. (2013) Two Sources of Subjectivity: Qualitative Assessment and Dimensional Uncertainty, *Inquiry*, 56(2-3), 258-277.
- Lasnik, P. (2017) *Subjectivity and Perspective in Truth-Theoretic Semantics*, Oxford U Press.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京:くろしお出版.
- 益岡隆志 (2001) 「第 10 章 価値判断を表す「ものだ」と「ことだ」」『日本語文法の諸相』東京:くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法一改訂版一』東京:くろしお出版.
- 森山卓郎 (1997) 「日本語における事態選択形式—「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造—」『国語学』188, (12)-(25).
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京:くろしお出版.
- 野田春美 (1995) 「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」『日本語類義表現の文法(上)』東京:くろしお出版, pp.253-262.
- Stalnaker, D. (1978) Assertion. In Peter Cole (ed.), *Syntax and semantics, volume. 9: Pragmatics*, pp.315-332. New York: Academic Press.
- 高梨信乃(2010) 『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』東京:くろしお出版.
- 田村早苗(2019) 「事態に対する評価を述べるコトダ構文の分析—コト節による Common Ground 更新の回避—」『北星学園大学文学部北星論集』57(1): 13-23.